宮崎大学教育学部附属教育協働開発センター研究紀要　第 30 号，63 － 79，2022

造形表現・図画工作・美術科における「造形的な見方・考え方」に焦点を当てた実践研究（２）

－新しい意味や価値を求めて－

幸秀樹 *・樺島優子 *・石川千佳子 *・大泉佳広 *・大野匠 *
三藤美穂子 **・永江彩乃 **・荒武紗代 **
郷田良太郎 ***・二宮優子 ***・立花克樹 ****

A Practical Study of Class Development Focused on ‘Artistic Approach’ about the Representation of Art in A Kindergarten, An Elementary school and A Junior high school(2) : In Search of New Meanings and Values

Hideki YUKI*,Yuko KABASHIMA*, Chikako ISHIKAWA*, Yoshihiro OIZUMI*, Takumi OHNO*, Mihoko MITO**, Ayano NAGAE**, Sayo ARATAKE**, Ryotaro GODA***, Yuko NINOMIYA***, Katsuki TACHIBANA****

Ⅰ．はじめに

本研究は、造形表現・図画工作・美術科において、造形遊びや表現・鑑賞活動をより豊かにするための実践研究である。昨年度より、本教科の特質である「造形的な見方・考え方」に焦点を当て、各学校園の実態に応じ、実践的な研究を進めてきた。前回の研究では、まず、造形的な見方・考え方を理解するために、形や色、材料や光、または全体のイメージといった「造形的な視点」について再確認することからはじめた。そして、各学校園の実践から、それぞれの子どもたちの発達段階による造形的な見方・考え方について、表現及び思考の働かせ方の違いを確認しながら、子どもたちに造形的な視点を意識させるための方法と、それぞれの実践研究の内容に沿って、造形表現、図工・美術科における造形的な見方・考え方とは何かを考察し、共通理解することができた。そこで本年度は、その継続研究をさらに進め、副題として「新しい意味や価値を求めて」と定めることで、子ども自身が学びを自覚し、新たな創造へと進み続ける姿勢をみていきたい。本研究を通して、造形表現、図工・美術科における新しい意味や価値について思考を巡らし、子どもたちが新たな造形的な見方・考え方を獲得し、社会や生活とより豊かにつながることができるような指導の在り方について考えていきたい。

Ⅱ．各専門分野から見る「新しい意味や価値」の捉え方について

１．公教育における造形・図工・美術教育の意義

前回の研究で「造形的な見方・考え方」の定義に関連して、子どもたちが感性や想像力を働かせながら世界や対象をどのように認識していくのかという点を確認した[1)]。小学校・中学校学習指導要領解説（図画工作・美術編）においては、「造形的な見方・考え方」を感性や想像力を働かせ対象や事象を造形的な視点で捉え、意味や価値をつくりだすと示されている。

*宮崎大学教育学部，**宮崎大学教育学部附属幼稚園
宮崎大学教育学部附属小学校，*宮崎大学教育学部附属中学校

今回の研究のサブタイトルを「新しい意味や価値を求めて」と設定した。意味や価値を「つくりだす」という行為が意味や価値の再生産や反復に限らず、新たなものを「創り出す」ことを期待していれば、そこには今までに見られなかった「新しさ」をどのようにしてつくりだすことができるのかという問いが生まれる。

新たな価値を生み出せるのは一部の才能ある者たちだけなのか、それとも全ての者にそれを創出する可能性があるのだろうか。ハーバート・リード（1893－1968）は、彼の著書の中で感受性は個々の体質の反映であり、その働きは遺伝的要素や初期の教育に条件づけられているとし[2)]、公教育の重要性について述べている。しかしながら、公教育は同時に危険なものであり、美的感覚を台無しにする場合もあると述べる。この指摘は半世紀前のものであるが、公教育が記憶、分析や分類、一般化などの知的能力を教え込むだけではなく、感情的自発性や視野の全体性、美的感覚を弱めていないか警鐘を鳴らす点[3)]では、今日の公教育における造形教育、図工・美術科教育の特質を押さえる上でも大切な指摘ではないだろうか。

２．美術理論からみる新しい造形的な見方・考え方

美術鑑賞関連授業の導入では、対象となる作品を３層構造で「考える」ように提案してきた。この三層構造で作品にアプローチする方法は、瞬時に生じた印象に対する好悪の判断に終わらず、作品世界に深く分け入るための思考の道具である。

第１の層は技法素材である。美術作品は、純粋な映像作品を除いて物質的基体を有している。第２の層は形象である。美術は造形芸術と呼ばれるように、視覚と触覚、いわば目と手が協働した感覚によって把握される形を持っている。形象から考える方法には、一般に構図や点･線･面といった造形要素が織りなす形態、色彩等に着目する造形分析がある。第３の層は意味内容である。宗教美術はもとより、対象の再現的模倣を行う、つまり具象的な作品には図像が含まれるので、絵の中の言葉としての図像に注目すれば、作品が発するメッセージを読み解くことができる。狭義の「造形的な見方」は、第１と第２の層に関わり、近代美術史学の技法史と様式史にそれぞれ対応する。しかし実際には、「丸くて赤いリンゴが描かれている」というように形象と意味内容は分ちがたく絡み合っているので、近代美術史学のイコノロジーに対応する第３の層も造形的な見方に関係する。

その提案に、知識の蓄積自体を目的とはしないで、美術作品を見て感じたことや想像したことを鑑賞者自身の言葉で語り合い共有する VTS（Visual Thinking Strategy）を加えてみた。詳細を述べる余裕はないが、例えば「絵画に描かれている場面の次の展開を想像して発表し合う」といった課題設定が注目される。そこでは、作品は完結したものという暗黙の前提に囚われず、ドラマのように時間的に開かれた存在だとみなされるが、答えとしての次の展開は与えられないので多様な想像が可能である。登場人物に自己を仮託する場合等はロールプレイングとの親和性もあり、美術鑑賞を通して他者の見方や感情を経験し表現する糸口になるかもしれない。

３．絵画（平面）表現の観点からみる「新しい意味や価値を求めること」について

「新しい意味や価値」とは、新たに創造する類のものよりも「見方を変える」ことによって生じる「新たな気付き」に重きをおいている。つまりは、純粋な「新しい意味や価値」の創造に挑戦することを否定はしないが、「新しい意味や価値を求めること」の中身が、アバンギャ

ルド的要素―既成の概念を否定し、革新的な行動を起こす事―に大半が占められているとは考えていない。「常識」や「普通」という思考を停止や狭窄に向かわせる様な物を、この場から排除することには同意する。しかし、時を乗り越えてきた伝統的「技法」や「価値」の全てを「古いモノ」として無意味･無価値とするつもりはない。目の前にある事象を解決するためには、先人たちの知恵や知識によって構築された技術等が有効・有能であることは確かであるからだ。では､何を「新しい」と評価し､何を「古い」と排除していくのか。その境目をどのように意識･決定するのか。その境目を、教える側が単純に設定してしまってはこれまでと何も変わらない。「教える側の価値観の押し付け｣､「学ぶ側の思考の束縛」に繋がるからである。よって、そこには明確な「境界線」を設定するべきではないと考えている。そして、教える側の知識・経験や常識による緩やかな「境界域」を設定しつつ、学ぶ側の自由な思考の展開を見守る事を提案する。

常識人ほど、その「常識」という名の鎖を少し緩めた方が、ここでいう「新しい」に気付くことも出来るのではないだろうか。ここでの「新しい」とは、「既にそこにあるモノ」からも発生しえるものであり、単純な「新たな創造」ではないのである。常識人こそ、必要に応じて見方を切り替える「スイッチ」のようなものを習得出来れば、より物事を楽しく捉えることができるのではないだろうか。そして、その切り替えた「見方」は生徒たちの方が得意としているのではないだろうか。通常、教える側は学ぶ側に既に価値の認められた事象を習得させる。しかし、生徒たち―その幼さからの純粋性や思春期の不安定性を内包した者達―から、時には共に過ごす日々の中で、成熟した大人だからこそ見逃してしまう事象を気付かせてもらえる場面があるはずである。つまりは、教える側の人間がその度量を持って、教育現場での一方通行になりがちなその枠組みを一時取り払い、よりフラットに、図工と美術の授業、そして図工室・美術室が、『共に「新しい意味や価値」を気付き気付かせ合う「時」と「場」』になっていくことを願っている。

４.「新しい意味や価値を求めて」彫刻領域からの見解

美術館に握りこぶしほどの石が展示してあったとして、これを美術作品だと言われればどう考えるだろうか。隕石などの貴重な鉱石で作られているのか、歴史的な意味を持った資料的な価値があるのか、或いは何万年もかけて自然が作り出した造形美を表現したものなのか、もしくはこうして思いを巡らすこと自体を目的として仕掛けられた単なる石なのかもしれない。只、もしその石が台座から転がり落ちてしまえば、硬質な音が静寂な空間に響き渡り、瞬く間に場を変容させてしまうだろう。

彫刻作品において、物を見ることと存在を見ることは異なる。概念的な情報による実感のない理解や､習慣化して当たり前となり気付けなくなった現象などによって「見えること」と「在ること」の間には隔たりができてしまう。物を取り巻く環境やそれが起こす現象を幅広く捉え、自身の体験や記憶をつなぎ合わせながら己として対峙することで「在ること」への解釈に近づくことが出来るのではないだろうか。

「自分なりの意味や価値を作り出すこと」とは、イノベーションのようなまったく新しい価値の創造や、誰も思いつかない独創的なアイデアの発見といった大げさな事ではない。自分の内側と向き合い、モノと主体的に関わるための“ものさし”を広げていく地道な作業に他ならない。

５．不断に意味や価値を創出する表現・鑑賞活動

人は目に見える世界を客観的事実そのものとして捉えるだけでなく、何らかの意味づけをしながら対象に眼差しを向けている。その意味づけは、人間が意図を持って設置した人工物を見る際に限らず、自然の森を見ても何らかの意味づけをする。その際に「神聖な森」というイメージを付加することも可能である。また、単なる樹木の密生地と言い切ることもできるが、そこにも資源、保水の意味や植物と土壌の豊かな空間という価値を見いだすことができる。

どこにでも転がっているような一個の石で何ら物理的な変形や加飾がなくても、渡された相手や手に入れた状況による意味の付与によって唯一無二の一品になることがある。

中埜肇は、「人間は、事実と意味の二つのレベルの両方にまたがって生きている。」と述べている[4)]。事実は目に見える現象として表れたものであり、意味は肉眼ではとらえられないものである。人は目に見えるものだけでなく、目に見えないものも見いだしながら生きている。見るということ自体に様々な意味を含み、「視的知性」（D・A・ドンディス）という言葉が示すように見ることと「認識、判断、思考」することは切り離せない。

この対象を意味づけしながら思考する際の「意味」という言葉について、浅田彰はフランス語のサンス（sens）という語を用いて、「意味」と「方向性」の同一性を指摘している[5)]。この解釈に従えば、意味とはものの在りようを方向づけるもの。ものを定位する方向性のことと言える。「価値」については、美的価値、理論的価値、実践的価値が定位できるが、特に美的価値についての特性としては、直観性、純粋内包性、要求性が挙げられる。直観性とは、美的価値の自律性を基礎づけるものであり、人は本質的・根源的な衝動によって美を価値づける。美的価値とは内在的・内包的価値であり、個々の主観に対して妥当性をもつ[6)]。

「意味づける」ことが「方向づける」こととの関連で言い換えることができるとすれば、その方向付けは様々な設定が可能になると言える。子どものごっこ遊びにおいて、一個の石が食べ物に見立てられたり、人に例えられたり様々な設定が可能である。その方向付けは微妙な変化も可能であり、同じ石がお団子やピザやお母さんやペットや様々な存在に置き換えられる。容易には分けられない（in-dividual; 分離不能な）石のような素材は、一個（individual）の存在物・者を意味しやすくなり、紙や枝などは加工・変形によって意味の変容（方向付けの変化）が促される。子どもたちがある対象に対して主体的に意味づけたとしても、対象の状態変化によって再定義を促される。また対象の変形や加工がなくても、そのものが置かれる状況・環境によって意味は変容してくる。野外に転がっている石もガラスケースに格納されれば、価値ある貴重な「月の石」のように見える。鑑賞活動においても、様々な意味づけのための設定が可能である。

表現・鑑賞活動の中では、子どもたちの試行錯誤のプロセスにおいて不断の意味の創出が発生していると言える。そして、その意味の生成と消失を見逃さず、筆を止め、手を止め、眼差しを向け、対象の美的「価値」をつける際は、個々の主観に対して妥当性をもてばよい。

Ⅲ．附属幼稚園・小学校・中学校での授業実践研究

これまでみてきた「造形的な見方・考え方」の研究を基盤とした「新しい意味や価値を求めること」に関する考察をふまえて、各学校園では継続的な実践研究を行った。まず、幼稚園で

は、各年齢の子どもの遊びを通した学びについて、ごっこ遊びの中に見られる造形的な見方・考え方に焦点を当て、写真を用いたドキュメンテーションを行った。小学校では、造形的な見方・考え方を働かせながら、自分にとっての意味や価値を作り出すための授業の導入とふりかえりに焦点を当てた実践研究を行った。そして、中学校では、薬研彫りの題材において、実技支援動画を活用し、実感を伴いながら造形的な視点を捉えさせる研究を行った。ここでは、各学校園での実践内容を考察することで、子どもたちが新たな造形的な見方・考え方を獲得する過程を追っていきたい。

１．附属幼稚園の実践（担当教諭：三藤美穂子、永江彩乃、荒武紗代）

（１）はじめに

幼稚園では、各年齢の子ども達が遊びを通してどのような学びをしているのか、その学びはどのようにつながっているのかを探っていくために、ごっこ遊びを中心に研究を行ってきた。ごっこ遊びの中に見られる造形的な見方・考え方に焦点を当て、写真を用いたドキュメンテーションを保育の記録として作成し、遊びの中の学びを支える環境の構成と援助を明らかにしていった。

（２）各年齢における写真を用いたドキュメンテーション

写真を用いたドキュメンテーションには、下記のように、①子どものつぶやき ②教師の読み取り、子どもの学び、経緯など ③教師の言葉掛け ④教師が特に大切にした環境の構成や援助を取り入れて構成している。

○　３歳児

【おにぎり屋さん・そうめん屋さんごっこ　3歳児　3期（11月上旬）】
年中児の『おまんじゅう屋さん』が、いちご組におまんじゅうを売りに来てくれました。おまんじゅうをもらった子ども達が、おにぎりをつくっておにぎり屋さんをすることを思い付きました。
①子どものつぶやき
梅干しのおにぎりにしよう
のりのおにぎりをつくろう
これはとくべつなおにぎり！
どのおにぎりがほしいですか？
お金を持って買いに来てくれた友達を見て、「お金つくれない」と言っている子ども達がいました・・・
お金がつくれないって困っているお友達がいるね。お金、どうする？
いろいろな味のおにぎりをつくり始めました！
いくつかのおにぎりができ上がりおにぎり屋さんを開店しました。
②教師の読み取り、子どもの学び、経緯など
③教師の言葉掛け
お金（の代わり）何でもいいよ！
いろいろなものをお金にしていいみたい
お金いっぱいになった！
近くで遊んでいた友達が「看板をつくるとみんなが分かる！」と言って、看板をかいてくれました。
おかわりあります
ストローやちぎったガムテープ、ブロック、積み木など、いろいろなお金でおにぎりを買ってもらいました。
おにぎりと一緒に売っていたそうめんを買ってくれたお客さんには、おかわりも勧めてみました。
おいしいですよ。食べてみますか？
④教師が特に大切にした環境の構成や援助
これを売りに行ってきます
味見をしてもらったり、売りに行ったり、お弁当にしたりと、いろいろな方法でおにぎりを売ることにしました。
今までに経験してきたことを自分達なりに再現する姿を見守りながら、一緒に楽しむ
いろいろな味のおにぎりをつくることを楽しむところから始まったおにぎり屋さんでした。自分達がつくったものでお店を開くことが初めてだった子ども達は、おにぎりやそうめんを売ってお金のやりとりをすること、看板をつくること、おかわりを売ること、味見をしてもらうこと、売りに行くことなど、年上の友達のお店屋さんに遊びに行ったり実際に経験したりして見聞きしてきたことを取り入れながら遊ぼうとしていました。それぞれが思い付いた遊び方を試す姿を見守りながら、お店屋さんのやりとりを一緒に楽しみました。

○　４歳児

【お祭りごっこ　４歳児　３期　（10月上旬）】

教師と一緒に折り紙の本を見ている友達のところに友達がやってきて、「何か折って、お祭りごっこをしよう！」ということになりました。

お祭りに行ったときのことを思い出して、金魚すくい、焼きそば、ペロペロキャンディーなどをつくりはじめました。

自分がお祭りに行ったときのことを思い出してつくっているんだね！

お祭りに使うものができあがりました。みんなでいすの上に並べていると、お客さんがやってきました。

お祭りをしていることを聞いた友達がたくさん遊びにきて、お祭りが盛り上がりました。

自分の経験を生かして遊ぶ姿を大切に

折り紙の本に載っている形からイメージを広げ、お祭りごっこが始まりました。自分がお祭りに行ったときのことを思い出して、お祭りの出店に出ていた食べ物や遊び道具をそれぞれ思い思いにつくり始めました。自然と役割もできていき、並べたいすの上にセットしてお祭りが始まりました。たくさんのお客さんがやってきて、お店の人とお客さんのやりとりを楽しんでいました。教師は一緒に遊びながら、自分の経験を生かして遊ぶ姿を認め、友達とイメージを広げながらお祭りごっこを楽しむ姿に共感しました。お祭りごっこの経験が、次はハロウィーン祭りごっこに発展していきました。

○　５歳児

【船で宝探しごっこ　５歳児３期（１１月上旬）】

底が広く高さの低い形に特徴のあるダンボールを見付け、「船をつくってみんなで宝探しに行こうよ！」とごっこ遊びが始まりました。

興味をもった友達が近付いてきました。

宝探しに行くために必要なものを次々と考え出し、つくって船に乗せていきます。

思いや考えを出し合って遊びをより楽しく

登園してくると、面白そうな材料を見付けては「これで何をする？」と話し合う姿が増えてきた年長児達。子ども達の目に付きやすいところに特徴あるダンボールを置いておきました。どんな遊びが始まるのかなと、わくわくしながら見ていると、船で宝探しに出掛ける準備が始まりました。まず、船をつくり、その後、宝の地図やお金、ランタン、掛時計、覗き穴、望遠鏡など宝探しの旅に必要なものを次々に考え出してつくって船の中に準備していました。興味をもって近付いてきた友達だけでなく、一緒に遊んでいる友達にも、自分がつくって準備したものについての自分の思いや考え、使い方、つくり方などを話してみるよう声掛けをすると、自分の思いや考えを積極的に話していました。遊びのイメージを膨らませながら共有していく姿が見られました。

（３）まとめ

本園では、子どもの遊びや育ちの実態などを考慮し、１年間を大まかに５つの期に分けている。今回は、３期（１０月・１１月）における各年齢の造形遊びを含むごっこ遊びについて、写真を用いたドキュメンテーションを作成し、学びの姿を捉え、遊びの中の学びを支える環境の構成と援助を明らかにした。３歳児３期の発達の姿としては、今まで経験してきたことを自分達なりに再現しようとする、４歳児３期では、自分達の経験を生かしてイメージを広げながら、かいたりつくったりしたものを遊びに生かそうとする、５歳児３期では、思いや考えを出し合って遊びをより楽しくしようとする姿を考慮しながら、子ども達がやってみたいという思いが実現できるように、いろいろな材料を準備したり、主体的に遊びを続ける姿を見守ったり、遊びが広がるような言葉を掛けたりといった適切な援助を行った。

また、ごっこ遊びの中に見られる造形活動において、３歳児のイメージする形に近付けようと色々と試す経験が４歳児の遊びや育ちにつながっていく。そこから、４歳児の１つのものからイメージを広げて色々なものを形づくっていくことを楽しむ姿へとつながり、イメージに合う必要な材料や道具を使いながら、自分のイメージしたものをつくることができる力が備わっていく。このことが、５歳児の学びや育ちへとつながっているのではないかと考える。

２．附属小学校の実践（担当教諭：郷田良太郎、二宮優子）

「造形的な見方・考え方」に焦点を当てた授業実践

図画工作科において育成をめざす資質・能力は、「生活や社会のなかの形や色等と豊かにかかわる資質・能力」である。図画工作科研究部では、子どもが「造形的な見方・考え方」を働かせながら、自分にとっての意味や価値をつくりだすことができる授業を行うことで、資質・能力の育成をめざしている。

昨年度は、自分だからできる発想や構想を生み出す工夫と、自分の作品のよさや美しさを捉えさせる工夫について研究を行い、次のような成果を得ることができた。

○　題材との出合わせ方を工夫し、題材ならではの表現が多様にあることに気付かせることは、子どもが「造形的な見方・考え方」を働かせながら、自分だからできる発想や構想の手掛かりを得ることにつながった。

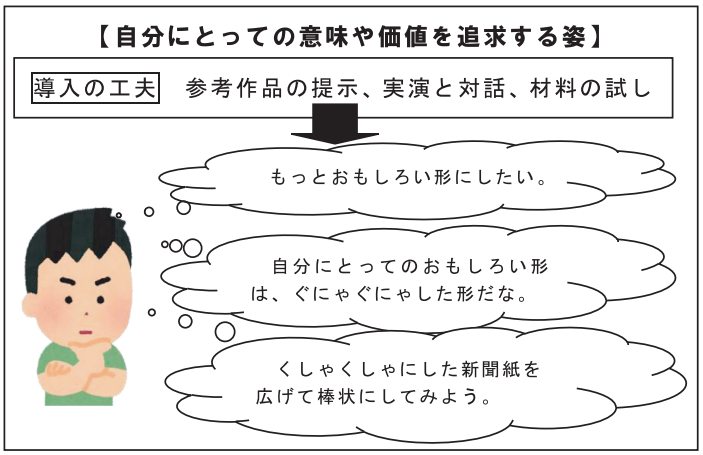
○　自分や仲間の作品の鑑賞のさせ方を工夫し、思いがけない自分の作品のよさや美しさに気付かせることは、子どもが、自分の作品のよさや美しさを捉えることにつながった。

これらの成果から、自分にとっての意味や価値をつくりだすことができるようにするには、授業における「導入」と、作品を見つめる「ふりかえり」に焦点を当てることが大切であると考え、本年度は、次の２点について研究を行うことにした。

○　自分にとっての意味や価値を追求し続ける導入の工夫
○　自分にとっての意味や価値を見いだすふりかえりの工夫

（1） 研究について

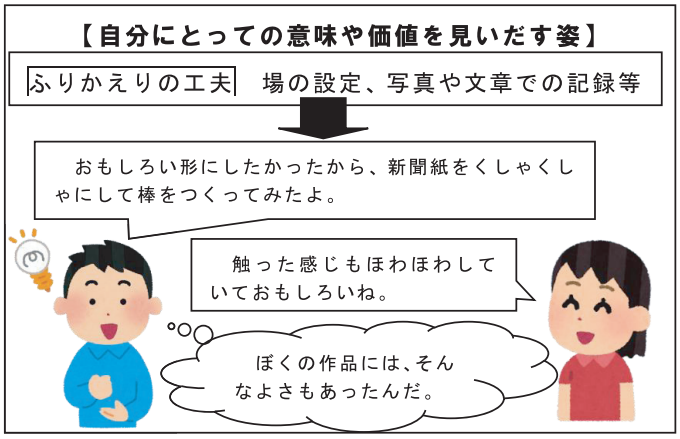
ア．自分にとっての意味や価値を追求し続ける導入の工夫



「導入」では、子どもが「造形的な見方・考え方」を働かせながら「もっと〇〇したい」という自分なりの課題をもつことができるようにしていく。右図のように、「もっとおもしろい形にしたい」「自分にとってのおもしろい形は、ぐにゃぐにゃした形だな」「くしゃくしゃにした新聞紙を広げて棒状にしたらぐにゃぐにゃにならないかな」等、その題材ならではの自分のこだわりを、自分にとっての意味や価値と捉え、それを追求し続けていくことができるよう、毎時間の導入の仕方を工夫する。

工夫については、子どもの発達段階や題材にもよるが、これまでの学びや仲間の考えを生かすことができるようにしながら、参考作品の提示や、実演と対話、材料の試し等を行っていく。

イ．自分にとっての意味や価値を見いだすふりかえり



「ふりかえり」では、子どもが「造形的な見方・考え方」を働かせながら、自分や仲間の作品を見つめ、自分のこだわりに気付いたり、仲間の見方や感じ方のよさに気付いたりすることができるようにしていく。右図のように、「おもしろい形にしたかったから、新聞紙をくしゃくしゃにして棒をつくってみたよ。」「触った感じもほわほわしていておもしろいね。」「それは気付かなかったな。ぼくの作品にはそんなよさもあったんだ。」等、毎時間の製作途中や終末時において、自分が働きかけたことに対する意味や価値を見いだすことができるようにする。

そのために、作品を介して子ども同士の対話が生まれるような場の設定や、製作途中のものも含めて自分の作品を写真や文章で記録する時間の設定を行っていく。

（2）実践

第６学年　題材「おもしろ筆」　　令和３年７月７日（水）（本時は３／５）

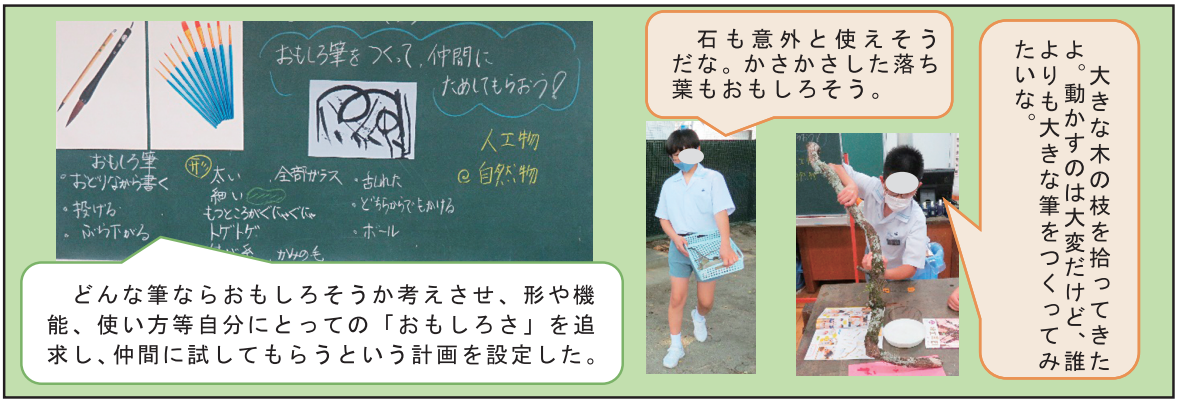
① 題材について

子どもの身の回りには、見方を変えると筆の穂先や柄の材料になりそうな自然物や人工物

がたくさんある。本題材では、自分なりの見方や感じ方で材料を集め、それらの材料に触れたり試したりして、筆あとやかくときの感じを比較する活動を行う。そのなかで、子どもが自分のイメージをもって材料や用具を選び、発想や構想を繰り返しながら表現方法を工夫し、自分だけの「おもしろ筆」をつくりあげていく姿をめざす。それは、図画工作科がめざす「自分にとっての意味や価値をつくりだす子ども」の育成につながると考える。

② 自分にとっての意味や価値を追求し続ける導入の工夫

題材の導入では、「おもしろ筆」という言葉のイメージから、どんな筆か想像させ、形や描いたときの線の感じがおもしろい筆をつくり、仲間のおもしろ筆を試してみようというゴールを設定した。その後、校舎内で材料を集めさせ、試しの活動を行った。

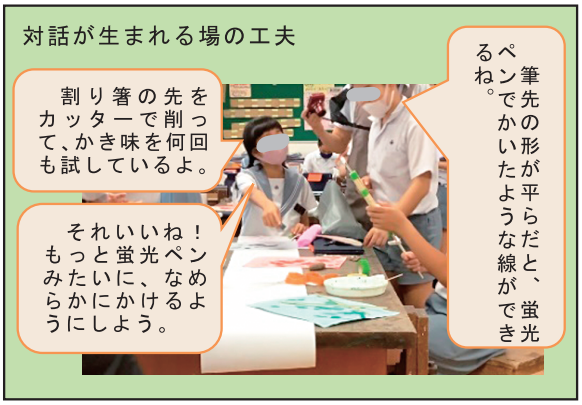


本時は、製作の第１時であった。導入では、前時の活動で、ある子どもが見付けていた「おもしろさ」を提示し、ここからどんな「おもしろ筆」ができそうか話し合わせた。様々なアイデアを出させ、「自分だったらこうしてみたい」と考えさせることで、自分のおもしろ筆をつくるという意欲を高めていった。

③ 自分にとっての意味や価値を見いだすふりかえりの工夫

仲間の製作の様子を鑑賞し、そこからおもしろさを見いだし、自分の表現に生かすことができるような場の設定と、タブレット型端末を使って自分の作品を見つめ直す時間の設定を行った。具体的には、４人で１枚のロール紙に試し描きをさせることで、子ども同士

の自然な対話が生まれるようにした。また、タブレット型端末を使って、写真と文字でこの時間の活動について記録をさせることで、自分がどんなことにこだわって活動をしていたのか分かるようにした。



（3）成果（○）と課題（●）

○　題材の導入において「おもしろ筆」がどのような筆か想像を広げさせたうえで、材料集めや試しの活動をさせることで、形や機能、描いたときの感じ等、自分にとってのおもしろさを追求する姿が見られた。

○　製作の導入時に、特徴的な形の材料を提示し、ここからどのようなおもしろ筆にしていくか、全体で話し合わせることで、自分ならではの材料の使い方や、めざす筆あと等への思いをもたせることができた。

○　場の設定により、鑑賞と表現を往還し、自分や仲間の作品のおもしろさを見いだす姿が見られた。

●　文字による記録では、「きれい」と感じる根拠が何であるのか等、形や色といった、共通事項に即した図工の言葉が使えるようにするための手立てが必要である。

3．附属中学校の実践（担当教諭：立花克樹）

（1）「造形的な見方・考え方」と「新しい意味や価値」の捉え方について

「造形的な見方・考え方」を理解するためには、「造形的な視点」を把握する必要がある。造形的な視点とは、形や色彩，材料や光、または全体のイメージのことであり、これらは造形活動における極めて基本的な要素であると言える。

本年度は、「和の木箱～目指せ、薬研彫り職人～」という題材で、木材という「材料」に着目し、実感を伴いながら造形的な視点を捉えさせる研究を進めた。機能や造形美を意識させ、「創造的な技能」について考えを深めさせることで、「新しい意味や価値」を生み出す楽しさを経験させたい。

（2）　実践研究

ア．題材における指導観

薬研彫りは、材料の面をＶ字形に彫る木工技法であり、彫刻刀を用いた基本的な技法である。表札や木工芸品の装飾などにおいて、伝統的に使用されてきた。技法の難易度は高いと言えるが、彫刻刀の扱い方を理解することで、意図に応じた彫刻を掘り進めること

ができる。また、薬研彫りは、四角形や三角形などを使った規則性があり、幾何学的なデザインを推奨することにより、技能に目を向けさせることができる題材である。意図に応じた表現に近づけるよう、“トライ＆エラー”を繰り返すことで深い学びを得ることができると考えた。

木箱制作についての事前アンケートでは、「楽しみ」と答えた生徒は２１名、「不安」と答えた生徒は１９名と、ほぼ半数に分かれた結果となった。「楽しみな理由」の欄には、「描くよりも、つくる方が楽しい」という意見や「工作や工芸はあまり経験がないから」などという意見が見られた。「不安な理由」の欄には、「思っていた仕上がりにならなかったことが多い」や「上手く彫れるか心配」などの理由が多く見られ、活動内容に不安を抱く生徒も多いことがわかった。

そこで指導にあたっては、生徒が意欲的に薬研彫りに取り組むことができる手立てとして、「Tec-tube」を活用した。「Tec-tube」とは、指導者が独自に制作、活用してきた「技能支援動画」であり、これまでに「三原色での混色」「平筆塗り」「トレースの方法」などの技能における導入で使用してきた。例えば混色であれば、茶色を作り出すために自分で考えさせ、挑戦してみる。できなければ、Tec-tube を鑑賞し、再度挑戦させる、といったような流れで実践してきた。これまでの実践の中で、生徒からは、「言われてもできなかったことが、知りたいことを同時に見ながら試すことができて、よくわかった」や、「先生に聞きに行こうと思っても、行列になっていて聞きに行けなかったが、自分で動画を見ながら確認することができた。」といった振り返りの記述が見られるなど、一定の効果が認められた。

本題材では、“トライ＆エラー”が前提にある。まず、基本的な彫り方について説明し、生徒自身が薬研彫りにトライさせる。なぜできないかを考えさせ、次に Tec-tube を配信し、またトライさせる。以降は、体験を伴って身に付けた知識･技能として、制作に活用させる。Tec-tube は、配信するタイミングが重要である。全体の進捗状況を確認し、配信する必要がある。また、今回は「パターンカード」を振り返りの媒体として扱う。「パターンカード」とは、創造的な学びの秘訣を言語化したものであり、本校では学校生活や授業の中など、様々な場面で活用されている。“トライ＆エラー”で見つけた自分なりの困り感の解決策を見出し、パターンカード化させることで、自分なりの工夫を視覚化できると考えた。

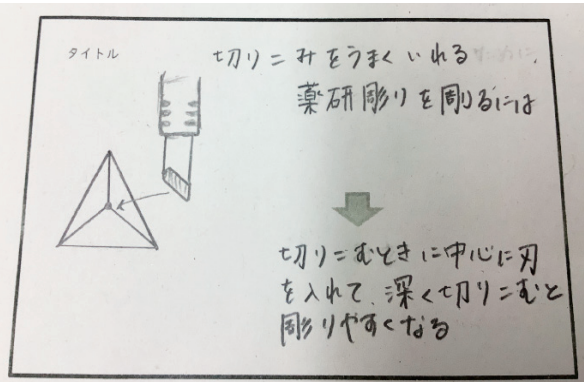
イ．学習指導過程

学習活動及び学習内容	指導上の留意点
1　前時を振り返る。 本時の目標 　薬研彫りに挑戦し、学んだコツや工夫をパターンカードにまとめよう！	○　題材の見通しをもつために、前回の資料を提示する。 ○　本時のゴールと今後の見通しをイメージできるように、ワークシートをモニタに投影しながら目標を提示する。
2　薬研彫りの基本的な彫り方を学び、演習板に彫り進める。	○　“トライ＆エラー”をさせるために、演習であることを伝える。また、彫刻刀によるケガを防ぐために、軍手着用を呼び掛け、安全面の指導を行う。※画像① ○　机間指導を行い、「難しい」と感じる原因を探るように声を掛ける。
3　Tec-tubeを視聴し、班で意見を交換する。	○　全体の進捗状況を把握し、自分の技能と比較させるために、ロイロノートを使ってTec-tubeを配信する。※画像② ○　ケガを防ぐために、視聴しながら彫ることに十分気を付けさせる。 ○　片付けの意識を高めさせるために、机上の道具を整理させ、手順を説明する。

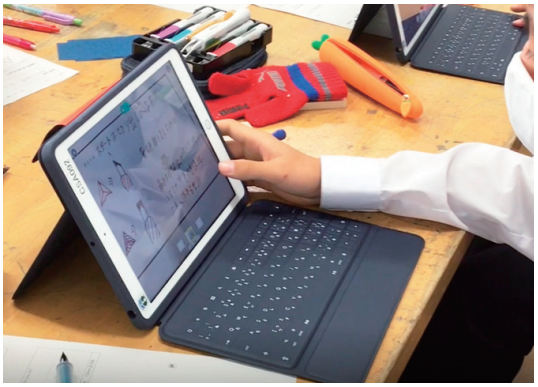
ウ　授業の様子

【①知識のみで彫ってみる】

【② Tec-tube を視聴し、違いを探る】



【③コツや工夫をパターンカード化】



【④パターンカードを共有する】

（３） 成果と課題

成果として、「動画を配信することで、教師への質問が減り、その分、動画を視聴しても困り感のある生徒に個別に指導できたこと」「生徒間で動画を視聴しながら技能の工夫を教え合う姿が格段に増えたこと」が挙げられた。生徒からは、「最初は薬研彫りの彫り方を聞いただけで彫ってみたが、上手く彫れなかった。動画を見てからは、何が違うのかがわかってよかった。」「上手くできないところの動画を何度も自分で確認できるので、自分のペースで彫り進めることができた。」といった感想が得られた。今回は、パターンカードにまとめ、共有することで、「創造的な技能」の習得によって意図した表現につながることを「価値」として実感させようと試みた。生徒一人一人にとって、「できるようになるために」思考を巡らせる体験になったのではないかと考える。

課題としては、「技能習得を目標と捉えてしまうこと」と、「動画の準備」が挙げられる。技能に特化した授業内容となるので、生徒の中には「上手く彫れないから評価が低いのでは」といった質問が見られた。評価基準を明確にし、生徒の意欲向上につなげたい。また、今回は平刀、切り出しを使い、計４本の動画を準備した。研究協力者の協力もあり、目的に沿った動画を準備することができたが、一校一人教科の美術科では、動画準備に多大な労力がかかることが今後の課題として残る。

Ⅳ．附属幼稚園・小学校・中学校での授業実践研究のまとめ

附属幼稚園・小学校・中学校において、昨年度に引き続き「造形的な見方・考え方」に焦点を当て、さらに今年度は「新しい意味や価値を求めること」に関する考察をふまえて、授業実践を行ってきた。それぞれの発達段階にある子どもたちが新たな造形的な見方・考え方を獲得する過程や教師の支援の在り方について確認する。

附属幼稚園では各年齢の造形遊びを含むごっこ遊びについて、写真を用いたドキュメンテーションをまとめ、まず、３歳児はおにぎり屋さん、４歳児はお祭りごっこ、５歳児は船で宝探しごっこの事例をあげている。ごっこ遊びは、子どもが興味関心のあるものを模倣することから始まる。子どもたちは、ごっこ遊びという空想世界の中で、目の前にある何かを、空想上の別のものに見立てて遊ぶ。白い紙を丸めた物体は、その瞬間、おにぎりに変わる。この見立てる行為とは、ものの見方を変えること、つまり、ものの新しい意味や価値を捉えることそのも

のである。この見立てる力は、目の前の材料や道具のもつ拘束から自由に発想し、新たな意味へと飛び越え、創造的な価値を形成する方法を身に付ける原動力である。また、子どもたちは、年齢が上がるにつれて、他者と空想世界を共有し、新しい見方や考え方、多様な視点を獲得していく。教師はごっこ遊びを見守り、認め、一緒に楽しみ、共感し、子どもたちの世界を壊すことなく、遊びの広がりを促す言葉かけや、活動を促す適切な環境構成に努めている。

附属小学校では、題材「おもしろ筆」の実践研究を行った。この題材は、身近な材料を使って、おもしろい形や線が描ける筆をつくるというものである。まず、児童にとっては、既製品ではない自分だけの筆という道具作りに新たな視点の発見がもたらされる。道具を作るという行為は、ありとあらゆるものが売られている現社会では、なかなか体験しがたいものであろう。また、ここで作る道具は、機能性よりもおもしろさを追求するものである。ここであげるおもしろさとは、新しい表現方法、あるいは新しい切り口の視点を持ったもの、普通ではない何か特殊なかたちを持つことに重きが置かれている。それは「自分だけの」という自己のおもしろさを追求することを出発点としている。活動の過程において、対話の生まれる場の工夫を設定することで、自然と自分や仲間の作品のおもしろさを見出す姿からは、新しい見方や考え方、多様な視点の獲得する子どもたちの様子がよくわかる。教師は、子どもたちが自分にとっての意味や価値をつくりだすことができるような授業の導入・振り返りの工夫や、材料の試しの場、活動形態の工夫、タブレット型端末を使った写真と文字での活動記録の活用など、活動の中で表現と鑑賞が行き来できる場の設定に努めている。

附属中学校では、彫刻刀を用いた基本的な技法である薬研彫りの題材に取り組んだ。薬研彫りを通じて、創造的な技能に目を向け、意欲的に意図に応じた表現に近づけるための試行錯誤ができる環境を設定している。その工夫として今回、授業者が独自に制作・活用した技能支援動画があげられる。これは、職人世界の師の背中を見て技術・手業を学ぶ様子に近いことが、生徒一人一人のペースに合わせて可能になるものである。このことは、技能の習得が目的ではないとはいえ、生徒らの薬研彫りの創造的な技能の習得に寄与しており、結果として、生徒らの制作意欲の向上につながっている。また、技能支援動画を活用し試行錯誤の結果、どのようにすれば思うように表現できるかのポイントを自分なりに解説したパターンカードを他者と共有しすることで、自身が見つけた工夫について新たな価値を見出す様子が伺える。今回、一人一台のタブレット端末が導入されたことにより、全員が一度に情報を共有することが容易になり、子どもたちがより活発に表現・鑑賞活動に参加できるようなICT活用の工夫がなされている。

V．おわりに

これまで行ってきた「造形的見方・考え方」の研究に続き、「新しい意味や価値」の捉え方についての研究から感じるのは、「新しい」という言葉が、今まで誰も見たことのない「新しさ」ではなく、子どもたちが、身の回りにあるものに対して、今とは違った見方・考え方の視点を増やしていくこと、つまり多様なものの見方の獲得を意味することであることがわかる。そしてまた、多様なものの見方の獲得によって、さらに新しい意味や価値を見出し、社会や生活の豊かさにつなげていこうとするものである。この点においては、大人よりも子どもたちの方がより柔軟な思考を持っていることは、授業実践においても明らかであり、子どもたちのひらめ

きや突拍子もない自由な発想、その世界観に対して、共感し共有できる姿勢を持ち続けたい。また、表現・鑑賞活動のいずれにおいても、思いを共有する場において、子どもたちが多くの新たな造形的な見方・考え方を獲得する姿が伺えた。このことは、ソーシャルディスタンスが強く意識されている今だからこそ、人とのコミュニケーションの必要性を再認識させられる。普段、意識せずに通り過ぎてしまっているものや存在に、路上観察的に、その洞察と思索のアンテナの感度を上げていくことができるのならば、そこにあるかないかは問題ではなく、みえるかみえないかが新しい意味や価値の獲得の境目となり、生活の豊かさにつながっていく。本研究で示されたように、子どもたちが新たな造形的な見方・考え方を獲得し、社会や生活とより豊かにつながることができるような指導の在り方について、今後も継続的にみていきたい。

註

1）幸秀樹、樺島優子、石川千佳子、大泉佳広、大野匠、岡崎貴子、永江彩乃、荒武紗代、郷田良太郎、二宮優子、立花克樹,「造形表現・図画工作・美術科における〈造形的な見方・考え方〉に焦点を当てた実践研究」,『宮崎大学教育学部附属教育協働開発センター研究紀要』, 第29号 , 2021年 , 55 ～ 69頁
2）Herbert Read, 8 The secret of Success, To Hell with Culture, Routledge,1963, pp.100
3）Herbert Read, ibid, pp.101
4）中埜肇,『空間と人間　文明と生活の底にあるもの』, 中公新書, 1989年, 122頁
5）浅田彰,『構造と力　記号論を超えて』, 勁草書房, 1983年, 29頁
6）福原淳,『美学事典』(竹内敏雄編), 弘文堂, 1961年, 84 ～ 85頁

参考文献

・文部科学省 , 幼稚園教育要領解説 , 平成29年度３月
・文部科学省 , 小学校学習指導要領解説 図画工作編 , 平成29年度７月
・文部科学省 , 中学校学習指導要領解説 美術編 , 平成29年度７月
・日本児童美術研究会 , 図画工作５・６下 見つめて広げて , 日本文教出版株式会社 , 平成31年検定済
・赤瀬川源平、藤森照信、南伸坊 編 ,『路上観察学入門』, 筑摩書房 ,1993